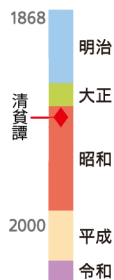


清貧譚^{たん}

太宰治^{だざい おさむ}



以下に記すのは、かの聊齋志異^①の中の一編である。原文は、千八百三十四字、これを私たちの普通用いている四百字詰め原稿用紙に書き写しても、わずかに四枚半くらいの、ごく短い小片に過ぎないのであるが、読んでいるうちにさまざまな空想がわいて出て、優に三十枚前後の好短編を読了した時と同じくらいの満酌^②の感を覚えるのである。私は、この四枚半の小片にまつわる私のさまざまな空想を、そのまま書いてみたいのである。このようなしぐさが果たして創作の本道かどうか、それには議論もあることであろうが、聊齋志異の中の物語は、文学の古典というよりは、故土の口碑^③に近いものだと思っっているので、その古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が、不逞^{ふてい}の空想を案配し、かねて自己の感懷を託しもって創作なりと読者に勧めても、あながち深い罪にはなるまいと考えられる。私の新体制も、ロマンチズムの発掘以外にはないようだ。

10

① 聊齋志異 中国、清代の怪異小説集。蒲松齡（一六四〇～一七一五）の著。
② 満酌の感 杯いっぱい酒をつがれたような満足感。
③ 故土の口碑 ふるさとの伝承。
④ 新体制 一九四〇（昭和十五年）、第二次近衛内閣によって敷かれた、全体主義的国家体制。ここでは「私」は、この社会的激動に自らの創作態度を対置している。
⑤ ロマンチズム 感情や自由な空想を重視する文芸上の傾向。

5

昔、江戸、向島^⑥辺りに馬山才之助^{まやさいのすけ}という、つまらない名前の男が住んでいた。ひどく貧乏である。三十二歳、独身である。菊の花が好きであった。佳^よい菊の苗が、どこかにあると聞けば、どのような無理算段をしても、必ずこれを買って求めた。千里^⑦をはばからず、と記されてあるから相当のものであることが分かる。初秋のころ、伊豆^⑧の沼津辺りに佳^よい苗があるということを聞いて、たちまち旅装を調べ、顔色を変えて発足した。箱根^⑨の山を越え、沼津に至り、四方八方捜し回り、やっと一つ、二つのみごとな苗を手に入れることができ、そいつを宝物のように大事に油紙^⑩に包んで、にやりと笑って帰途についた。再び箱根の山を越え、小田原の町が眼下に展開して来たところに、ぱかぱかと背後に馬蹄^{ばてい}の音が聞こえた。緩い足並みで、その馬蹄の音が、いつまでも自分と同じ間隔を保ったままで、それ以上近く迫るでもなし、また遠のきもせず、変わらずぱかぱかついて来る。才之助は、菊の良種を得たことで、有頂天なのだから、そんな馬の足音などは気にしない。けれども、小田原を過ぎ二里行き、三里行き、四里行っても、相変わらず同じ間隔で、ぱかぱかと馬蹄の音がついて来る。才之助も、初めて少し変だと気がついて、振り返って見ると、美しい少年が奇妙に瘦^やせた馬に乗り、自分から十間^⑪と離れていないところを歩いている。才之助の顔を見て、にっと笑ったようである。知らぬふりをしているのも悪いと思って、才之助も、ちよっと立ち止まって笑い返した。少年は、近寄って馬から下り、

「いいお天気ですね。」と言った。

15

⑪ 十間 一間は約一・八メートル。

10

⑩ 油紙 桐油などを塗った防水用の紙。
⑨ 箱根の山 旧東海道の難所であった箱根峠。
⑧ 伊豆 旧国名。静岡県伊豆半島の一部。
⑦ 千里 一里は約四キロメートル。
⑥ 向島 今の東京都墨田区内、東京の東部を流れる隅田川東岸の地。